

P034

金田尚也・戸田武・古屋廣光・藤晋一

イネばか苗病菌の種子予措中の動態

Kaneda, N, Toda, T, Furuya, H, Fuji, S

Ecology of Fusarium fujikuroi at Seed Soaking Period.

イネばか苗病は、種子予措中に健全種子に感染することが知られているが、その詳細は明らかではない。そこで GFP 発現・ハイグロマイシン耐性菌の胞子懸濁液を浸種液として、予措中における菌の動態調査を行った。予措中に経時的に種子を取り出し、ハイグロマイシン含有培地に置床して穀内部への菌の侵入の有無を種子を脱ぶして調査した。その結果、浸種 6 時間後にすでに穀内部に侵入していることが明らかになったが、品種間差は認められなかった。浸種中の大幅な菌侵入率増加は認められないものの、温湯消毒あるいは脱ぶ後次亜塩素酸処理をした場合の一部において菌が生存していたことから、浸種中にも侵入行動が起きている可能性が示唆された。催芽処理後では、殺菌剤処理の殺菌効果が低いこと及び無処理区において大幅な侵入率増加が見られたことから、イネばか苗病菌は主として催芽処理時に侵入行動が起こっているものと推察された。

(秋田県大生資)